

～人の生老病死と高所環境-「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応-～

編集・発行：高所プロジェクト文化班アルナーチャル研究グループ（今号編集：宮本 真二）
 住所：〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所
 研究プロジェクト・ホームページ：<http://www.chikyu.ac.jp/high-altitude>

■Geography■

健康診断キャンプでわかった

4つのグループの Brokpa

安藤 和雄

(京都大学東南アジア研究所)

Monpa は、主な生業により Brokpa と Unpa の二つのグループがあることが、私たちが調査を実施しているインド・アルナチャルプラデシュ州の West Kameng 県 (District) の Dirang 郡 (Circle) で知られている。Brokpa とは、草地での遊牧を意味する Bro に人の意味である Pa の合成語で、ヤク、高所の牛、その雑種を放牧によって飼育し、搾乳された乳を材料にチーズ、バターを主な生業としている。Unpa とは、耕地の意味である Un と Pa の合成語で、トウモロコシ、ソバ、ダイズ、イネの栽培を主な生業としている。2008 年以來のこれまでの調査で、以上のことが分かっていたが、2010 年 9 月 2 日～12 日までの標高 3500m の尾根筋の道路の脇にテントを張って、夏の草地から秋の草地に移動しつつある仮の小屋づみをしている Brokpa の人たちに呼び掛け、健康診断キャンプを行った (写真左)。



13 日～
 15 日には、
 Brokpa
 の定住
 の住居
 がある
 標高
 1800m の

Baruchi 村の小学校のキャンパスを借りて、下で Unpa の作物栽培の面倒をみている Brokpa の人々を主

な対象として、健康診断キャンプを行った。小学校キャンパスでは、小学校の協力を得て、使われていない教員宿舎、コミュニティホールを宿舎として、教室の一部を宿泊地とした。健康診断は、地元の West Kameng 県の保健局の医師、医療ジアシスタント、ボンデイラ大学の学生、旅行代理店 (Himalayan Holidays) のスタッフらの協力を得て実施された。

点在する草地 (Broksa) の仮の小屋 (Brokpa の仮の家を Bram という) や、農耕地の Baruchi 村でもさらに 3km ほど山の奥にはいっていき Brokpa の人たちの家々をたずねた (定住の家を Phei という)。仮住の小屋からもよりの車道まで出てきてもらい彼らを車 (ステーションワゴン) でピックアップし



てキャンプに来てもらうためにあらかじめ健康診断の日時の都合を Brokpa の人々の家々を 1 日から数日前に訪れ決めていったのである。仮の小屋や定住の家の距離が健康診断キャンプから離れすぎ来てもらうことが難しい場合は、私たちが家々に出向いて健康診断を行った (上写真)。

健康診断キャンプを実施することで、これまで Unpa の人々のよりも私たちにとって遠かった Brokpa の人々の日常性に触れ、ぐっと距離が縮まったとともに、いままで見えてこなかったことが分かるようになった。例えば、私たちが Brokpa と呼んでいたのは、Nor Brokpa (Nor ノールとは、ヤクや高所牛、その交雑種呼び、それを専門に飼育する人

たち)で、他に Shisha Brokpa (Shisha シシヤとはヒツジやヤジを飼い、主に毛をとっている人々)、Wa Brokpa (Wa とは Unpa の村付近で飼われている「低所牛」を飼って乳牛生産を主に行っている人々)、そして、現在はほとんどいなくなった Kurta Brokpa (Kurta とは馬のことで、馬の飼育をしている人々)の合計4つのグループの Brokpa がいることである。季節移動の生活をするのは、Nor Brokpa と Shisha Brokpa で、現在出あうことができた Wa Brokpa は、Unpa の村である定住村である Dun の付近で放牧をおこなっていた(下写真)。インド独立後アッサム州の Tezpur から Tawang 間の車道の開通する以前、Unpa は農産物を馬のキャラバンを組んで、アッサムやチベットに運ぶ交易をおこなっていた。



馬がトラックにかわり、道路が開通していないチベットとも国境で交易が途絶えたことから、現在は、Kurta Brokpa は見かけることがほとんどなくなったのだという。また、Baruchi 村には Unpa とともに、Brokpa の定住集落があることや、Mandalang の三叉路から南に下った大きなもう一つの谷の Pudung 村にも Unpa とともに Brokpa の人々が定住家屋をつかって古くから住んでいることも今回の健康診断キャンプで、実際にこれらの Brokpa の人々と放牧の草地で出合ったことで分かってきたことである。Brokpa の人々を知るためには、実際に彼らの日常世界にこちらから飛び込んでいくことがいかに重要かを思い知らされた健康診断キャンプでもあった。

(注) 本文の中にでてくる地方名などのローマ字表記は、調査に同行し、通訳をしていただいた Dirang 村の Rinchin Tsering 氏 (Brokpa の社会福祉協会会長) によった。記して感謝致します。

■Data Base■

連載「インド北東部における植生に刻まれた歴史」

4. ディランのチーズ味のソバ

小坂 康之

(総合地球環境学研究所)

インドに長く滞在していると、麺類が恋しくなってくる。長粒米にダールをかけ、脇に盛ったサブジと一緒に指でかきまぜながら食べるのも楽しみだけど、たまには箸で麺をすすりたくなる。アルナーチャル・プラデーシュ州では、チベット風の汁うどんでも言うべきトゥクパを出す食堂は多いが、どこも似た味でさびしい。そのような状況の中で、ディランのソバは、特筆すべきものだろう。

ディランの宿で供されたソバは、麺が太めで、10cm 程度に切れているものの、100%のソバ粉から作られたという。まず、ソバの種子を水車で挽いた粉に湯を混ぜてこねると、ソバガキができる。そして横杵に似た木製の道具を用いて、ソバガキの塊りを複数の小さな穴の開いた板に押し付けると、細長い麺がでてくる。麺が押し出される板には、穴の大きさの異なる2種類があり、麺の太さが調節できるようになっている。文献によると、このようなトコロテン式のソバ麺は朝鮮半島から東ネパールまで広く分布し、包丁で切って麺にするソバキリは日本独自のものとされる(大西, 2001)。

ちなみにディランでは、3種類のソバ属植物の利用が確認された。ソバ、ダツタンソバ、シャクチリソバである。最も一般的に食べられているのは、日本でも栽培されるソバである。現地ではグルン・ツンと呼ばれ、その種子を挽いた粉からソバガキか上記のソバ麺がつくられる。次に、ブラ・スム(またはブラ・スマ)と呼ばれるダツタンソバも、ソバと同様に種子を食べるために栽培される。種子に苦味があるためあまり好まれないものの、ソバよりも早く成長することや、葉になることが評価されていた。そして現地でタム・ナンと呼ばれる野生のシャクチリソバは、葉が野菜とされる。ソバとダツタンソバの葉も同様に食べられるという。なお大西(2001)によると、ソバとダツタンソバの栽培起源地は雲南省西北部、野生のシャクチリソバはヒマラヤから中国西部にかけて分布する。

ところで、驚いたのはソバ麺にかける汁だった。ジャガイモやキノコを具にした黄白色の汁からは、独特な発酵臭がする。聞くと、チーズをもとにした汁だという。ディラン周辺では、標高 1500 メートル

ルから 2500 メートル付近に暮らす農耕民のディラン・モンパ族の人々が、トウモロコシやソバ、水稻を栽培している。一方、それ以上の標高では、ブロッパと呼ばれる牧畜民がヤクとその交雑種を飼養し、チーズやバターを生産している。そして農耕民と牧畜民の間で、農作物と乳製品が交換される。仏教徒のディラン・モンパ族は狩猟や漁撈をほとんど行わないため、牧畜民の産する乳製品が貴重なタンパク源とされてきた。

黒味がかった麺に、黄白色の汁をかける独特のソバには、ディランの人々の生活文化が色濃く反映されているのである。

(参考文献)

大西近江. 2001. 「ソバ属植物の種分化と栽培ソバの起源」. 山口裕文・島本義也編『栽培植物の自然史』北海道大学図書刊行会, pp 58-73.



(写真1.) 2008年9月5日. ディランの宿で食べたコロテン式のソバ麺. チーズ風味の汁が独特である。



(写真2.) 2008年9月13日. ディラン近郊の畑で栽培されるソバ. トウモロコシの収穫前後にトウモ

ロコシの株の間に播種され、約3ヶ月で収穫される。

■Health and Life■

Namshu (ナムシュ) 村世帯調査

石本 恭子
(京都大学・院)

2009年7月16日から22日までNamshu村の世帯調査を行った。

Dirangの町からNamshu村までは車で1時間かかる。途中までアスファルトで舗装されているので比較的スムーズに行き来できるが、毎日の往復は時間のロスである。そこでテントを持ちこんで村に滞在することにした。Sub Center (村の診療所) のMedical Staff である Rinchin Tsering 氏の家の近くにテントを設営した。学校も近くにあり、テントを覗きに子どもたちがやってきました(写真1)。馬や牛もうろうろしていたりにぎやかであった。夜は、馬、牛が草をむしゃむしゃ食べる音と、テント内を虫が飛び回る音でなかなか寝付けなかった。

水場がどこにあるかというのは生活の上で非常に重要である。水場が遠ければ、大きなタンクを背負って水を運ばなければならない。そうすると食事の支度も一苦労であるが、幸いにしてすぐ横に小川があり水を得ることは比較的容易であった。Namshu村は水場が多く、またその水はきれいである。食事は同行したコックが作ってくれた。ほぼ毎食、白米、サブジー(カレー味の野菜炒め)、ダル(豆スープ)である。自然の中で食べるカレーはレストランの味とは一味違っていた(写真2)。

調査を行うにあたって、訪問時間が問題となった。我々が活動しやすいのは日中である。しかし、村人は畑仕事に出かけるので日中はほとんど家にいない。在宅している早朝と夕方に調査に出かける計画としたが、食事の支度、家事、子どもの世話など忙しいので早朝はやめたほうがよいと Rinchin 氏にアドバイスをもらった。そこで、調査は夕方以降に集中して行うことにした。午前中は、村のゴンパ、畑にでかけたり、高齢者の家庭訪問を行ったりした。雨季の初めであったので雨を心配していたが、雨は降らず晴天が続いた。日差しが強くとにかく暑かった。私の温度計はゆうに30度を越していた。夕方になり少し涼しくなると、調査開始である。2チームから3チームに分かれて各家を訪問し、家族の人数、年齢などを聞いて回った。私は、ガイドの Passang 氏と Mintu 氏とともに住宅地周辺を担当した(写真3)。村は、急な坂、細い道が多いので、こけないよう

注意が必要である。庭先では、女性がリビチュラー（納豆）を作っていたり、織物をしたりしており、その周りでは、子どもたちが遊んでいた。そして、木でできた扉を入ると居間になっている。いろいろがあり、薪を燃やしている。黙々と煙の立ちこめている家もあり目が痛くなった。いろいろにはコーチュールといわれるポットにナマックティー（塩とバターが入った紅茶）が作ってあり、ちょっと一休みというときにすぐに飲める準備してある。棚には鍋や食器が整理されて並べてある。一見すると箆笥のようにも見えるガングと呼ばれる木の入れ物は、穀類を保存するものである。ベッドのない家は床に手織りの毛布を敷いて家族みんなで寝ていた（写真4）。奥の部屋にはチューションと呼ばれるチベット仏教の祭壇があり、信仰が深いことが分かる。20時を回って家を訪ねると、寝ている人もいて、寝間着姿でびっくりした顔で扉を開けてくれた。訪問するとナマックティーでもてなしてくれる家がほとんどで、2・3件まわるとお茶でおなががいっぱいになった。中にはアラという地酒を出してくれる家もあり、ガイドの Passang 氏とホロ酔いになることもあった。

約100世帯の調査を行った。協力していただいた村人のみなさんにこの場を借りてお礼を述べたい。また、この調査で素敵な仲間ができたことは言うまでもないが、思い出深いのはそれぞれの家のアラの味と、体中に刻まれた虫さされのあとかもしれない。



写真1 学校に通う子供たち



写真2 食事中。右から Moju Riba 氏 (Rajiv Gandhi University, 院生), 小坂氏 (総合地球環境学研究

所)、Mintu 氏 (小学校教諭), Jumri Riba 氏 (Rajiv Gandhi University、地理学科), 石本



写真3 Namushu 村の住宅地



写真4 室内の様子

■Books■

Mark Shand (2002) River Dog : A Journey Down the Brahmaputra. Little, Brown, London, 338p. ISBN: 0-316-86187-1 £10.99

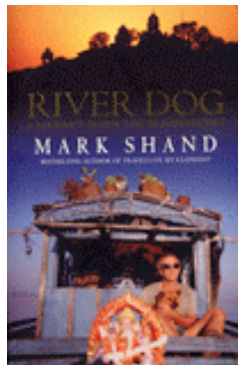
内田 晴夫

((独) 農研機構・近中四農研・四国研究センター)

ブラマプトラ川をチベットからベンガル湾まで旅する。本書は、旅好きの作家がその夢を叶えようと試みた旅行記である。彼は、当初、全行程を一気に船で踏破するつもりだった。しかし、中印国境を船で通過する許可など下りるわけもなく、残念ながら今回は、アルナチャール・アッサム・バングラデシュの旅となっている。象に乗ってインドを旅行した経験のあるこの作家は、旅仲間として犬を連れて行くことを思い立ち、それが本書のタイトル「リバー・ドッグ」となった。「バイティ (弟)」と名付けたトリプラ犬 (真偽は不明) と友人やガイド達、役

人や地元住民との交流を中心に、歴史や社会背景、探検家達の活躍にも触れながら展開するストーリーは、読者を強く引き込む。

話は1998年6月、チベット西部の「聖なる山・カイラス」を訪れた作家が、ブラマプトラ川の源から小石を持ち帰ることから始まり、12月、旅の終わりにベンガル湾でその石を投げ入れて終わる。その間の冒険で特筆すべきは、マクマホン・ラインへの進入である。デリーの国務省で「これは歴史的サインだ」と言われながら、中印国境付近への立ち入り許可を取った彼は（このために2年かかった）、マクマホン・ラインの限界ぎりぎりまで愛犬とともに中国の衛星に手を振り、北京で大騒ぎになっていることを想像して喜ぶ。危険の中に遊びを見つける、旅の達人ぶりを見るようである。アッサムではマジュリ島の僧院やワイルド・グラス（ホテル）にまつわるエピソード、インド・バングラ国境を命がけて歩く話などが興味を引く。一方、バングラデシュに入ってから全体的に暗く、汚く、貧しい色調で語られる。ブラマプトラ川の中・下流では、旅情がかくも違うものかと知らされる一冊である。



■Opinion■

陸封された地域の「解放」

河合 明宣
(放送大学)

チベット大高原は、南北と西三方を標高5千から8千m級の高山に囲まれ、高原台地の標高自体が4千mを超えている巨大な塊である。この台地は、広大な地理的距離で隔絶されている。南は、ベンガル低地からヒンドスタン平原に繋がるヒマラヤ山脈の急峻な斜面で、困難な幾つかの峠越え歩道以外アクセスはない。厳しい乾燥及び極寒な冬と地理的な隔絶は、チベットの文化や伝統を作り上げた。

クロードは、チベットの特異性を次のように言う。「1950年に中国の監督下に置かれるまで、チベット文化が他のどの文化よりもみごとに、精神世界、言葉を変えるならば霊的宇宙と日常生活の世界とのあいだ、・・・および大衆の日常生活の運不運のあい

だに希有な親密性を保ちつづけてこられたという特異性である。沈黙に沈み、人を寄せ付けない広大な領土が、人の性格を形作り、チベット人の伝統に露出する神秘的情熱を鍛えあげた。」(クロード・B・ルヴァンソン『チベット—危機に瀕する民族の歴史と争点—』白水社、2009年、65頁)。

しかし、1959年中国のチベット併合、65年自治区の公式発足を通して、「標準化された中国版『幸福』」(同、81)が強制され、外部の影響力が急速に作用を始めた。80年代以降の西部開拓の重点地域として、空路、道路網、2005年ラサ・北京間の鉄道開通がこの流れを加速させた。生活改善目的で、遊牧民定住化政策の推進が決定された。「従前の暮らし方を破壊することにより、チベット人の顕著な文化的特徴をこっそりとかき消そう」(同、80)とする。チベットの同化政策は、近代的交通インフラ整備に大きく依存した。

チベット併合時ダライラマの亡命路は、59年3月30日アルナーチャルのタワン着、デラン、ボンディアラを経てテズプールから列車であった。ダライラマ受け入れにより、54年周恩来・ネルー平和五原則以来の中印友好関係が不安と緊張度を増した。59年9月に国境を巡って武力衝突が始まり、戦闘は62年10月カシミールとタワン周辺で大規模化した。11月には停戦となった。

戦闘で中国軍の圧倒的優勢に屈したインドは、同地域に対し、英国統治を継承し NEFA (North-East Frontier Agency) として印度の他の利域から隔離する政策を改めた。実効的支配強化を目的とした道路網及び軍駐屯地の整備、軍増員を急速に進めた。60年5月にはネルー首相は、インド北部及び東北部の国境道路建設・維持管理を目的とした工兵隊組織 (BR0 : Border Roads Organization) を陸軍中将の揮下に結成させた。建設作業員及び軍入隊は、地域に膨大な雇用を生み出した。特別保護区として閉ざされていたアルナーチャルもチベットとほぼ同じ時期に交通インフラにより、外部との繋がりを急速に強めた (写真下は2005年ラサ近郊にて)。

